



日本の地形・地質 安全な国土のマネージメント  
のために

社団法人全国地質調査業協会連合会編  
鹿島出版会刊  
定価4,700円(税別)  
ISBN4-306-02334-6

—変動帯の応用地学の好著—

地質学に対する社会の要請に、最前線で応じているのは言うまでもなく地質コンサルタントの技術者です。その技術者達によって書かれた応用地質学的観点からみた日本列島の診断書と、適正な国土利用のための処方せんをまとめたものが本書です。

この日本列島が美しくも、脆く傷つきやすい地質特性を持つことは地学を学んだことのある人なら誰でも知っている常識でしょう。しかし、その特性を非専門家に的確かつ具体的に伝えることは容易ではありません。もちろん、これまでもそれを伝えることを意図して書かれた良書は多数ありますが、本書の特筆すべき点は現場技術者ならではの具体的なエピソードが豊富に盛り込まれていること、それ故に「傷だらけ列島」の実態を余すところなくリアルに描き出していること、ではないでしょうか。たとえば青函トンネル(約54km)と英仏海峡トンネル(約51km)を比較すると、前者の地質が後者に比べきわめて複雑であることは誰でも容易に想像できるでしょう。しかし、後者が厚さわずか20m余りの1枚のチョークマール層を選んで掘り抜いて

いること、そしてその分布を確認するために140本以上の海底ボーリングを行なったことを知る人は少ないでしょう。この1件からも、改めて日本の地質の複雑さは世界でも特異なものであること、(恥ずかしながら抱いていた)単純な地質ならば調査は容易だろうという想像がいかに甘いものか!、を私は思い知らされました。さらに、地質調査の不備による失敗の事例も紹介されており、貴重な教訓を次代に伝えようとする技術者の意志と責任、そして地質調査の重要性について考えさせられます。

前書きには、本書が建設コスト削減に貢献する地質調査の役割をまとめたパンフレットを基に書かれたという出版の経緯が記されています。しかし、本書には宣伝色は全くなく、変動帯の応用地質的特性をまとめた科学書と評価すべきものです。大袈裟な言い方もかもしれませんが、このような深みのある本が苦悩する地質調査業の中から出されたことに、斯業の将来に希望を見いだせると感じました。

最後に本書は国土のグランドデザインを考える行政担当者や土木関係者だけでなく、大学や研究機関に属する、いわゆる「純地質」専門家にも読んでいただければという読後感を申し添えます。地質学が社会の要請に応じようとするれば、必ず狭い専門分野にとらわれない自然と社会に対する広い視野と責任が要求されます。本書は、単に応用地質学のテキストであるにとどまらず、「地質学の社会への貢献」にあたって欠くことのできないこれらの視点を認識するきっかけとして、意味を持つのかも知れません。自己への反省を含めてそんなことを感じました。

(小松原 琢)